

特別講演 I 第51回 日本赤十字社医学会総会

「知床 オホーツクの自然を守る
過去 現在 未来」

元斜里町長

ごらい さかえ
午来 昌

知床半島は、長さ70K、幅は基部で25Kの細長い半島である。半島の主峰であるラウス岳の山からは両側の海からそそり立つように1200-1600mの急峻な山々が一列に連なっている圧巻の景観。知床連山と呼ばれるこれらの山々は、今から100年前の火山活動で形成された。この半島にいつの時代から人々が住みはじめたのか。考古学者の話によれば、今から八千年前に半島から出土した遺跡から推測して縄文前期・中期・後期・オホーツク文化期・擦文文化期そして14世紀-18世紀のアイヌ文化期と民族の移動があり、我々の知らない時代に人々が自然の恵みを受けて暮らしていた時代があったこと、アイヌ文化期になり和人が北海道に移住して先住民族との交流が始まる。知床半島に松浦武一郎や間宮林蔵など知床からカラフトまで探検が記録として今にあること、先住民族に文字は無かったこと言葉の伝承であり、唄であり、踊りであった。知床に和人が移住した明治の末期、多くのアイヌの方々との交流をしながら定住をできたのも、暮らしの知恵を学んで生きのびらえた。

私の祖先は大正七年の春に開拓者として今の地ウトロに入植。当地区は大正元年から入植が始まり大正七年頃は30年近い年数があり入植した人々は大木との戦い、朝早くから夜遅くまで重労働にうち勝って今を築いてくれたこと当時文通は網走からの船か斜里からの小船しか無かった。後は陸路を歩く。海岸を歩き、川を渡り、斜里まで足の強い男で10里の道を1日で弱い人は途中日の出(旧名)知布泊に駅通所があり、これは入植者や奥地旅行者のための宿泊所があり一泊して二日かかりで斜里市街まで到着すると言う大変苦勞の多い地区であり、住民の要望により山道が完成したのが大正11年-12年今の日の出からウトロまでこれにより夏も冬も斜里までの道が出来、地元の入植者はようやく安心出来たと当

時の古老から話を耳にした。

私は1936年昭和11年生まれ。開拓農家の三代目として生まれ、地元の小中学を卒業、中学三年の3月に父親が山の飯場で脳溢血で一週間で天国へ、母と8人の子の長男としてこれからどうしよう。高校もあきらめ母と二人兄弟を守って行く。私よりもオフクロの苦勞は大変なもの畑がはじまると地下足袋をぬいで部屋で寝たことが無い。玄関の台所の板間に寝て明けたら畑で働いていた姿を見て育った青年期、早く一人前に仕事ができるようにと自分なりに頑張ったつもり。一人淋しさを晴らすために時間があると羅臼岳や近くの山々を歩き出した。山は私に元気をあたえ、友を紹介してくれ、唄をそして心をあたえてくれた知床の山々、多くの人々との出会、交流、絆、友情、田舎者でも平気で俺は知床で百姓してんのさ!と言えるように元気をくれた山々。そして人。別れの時、午来さん!知床を守ってね。その声に励まされ自分なりに自然とのお付き合いが始まる。先住民の生き様は私にとって大いなる知恵の宝箱であった。森と川と海、命をいただいて生きれる畏敬の念。ヒグマ、シマフクロウを神として暮らしの中にあり余分な物はとらず、生きる分だけいただく海の物、川のもの、森の物に感謝の心で生きて来た。だからこそ数千年も知床が原生のまま今にあることを教えてくれた民族の歴史。それが和人が北海道に入り込み100年で先住民族の文化をたやし、海も森も川もメタメタにしてしまった我々の先人は取り返すことが出来ない北海道にしてしまったこと猛省をすべきと思う。

1972年ストックホルム、ユネスコ大会で遺産条約が制定され、日本は20年後1992年に条約に加盟。日本の加盟に早くから提言をしていた学者や自然保護団体は、なぜ日本が条約を批准しないのか、日本政府に働きかけを続けて来た。結果93年には文化遺産

は法隆寺、姫路城、自然遺産は屋久島、白神山地の二ヶ所。この時北海道が何にも運動をしなかった事に不満を持ち、斜里町として自然遺産の調査研究を担当課に指示をして知床の世界自然遺産を目指す行動にでる。知床では過去に知床で夢を買いませんか。知床100平方メートル運動、知床国有林、伐採問題、ルシャ地区の民有林買上げ運動知床半島突端にロッジ建設問題、ルシャ林道の建設、知床断道建設、斜里町は問題をかかえながらも環境に重点を置いた町政を柱に、行政も民間と共に恵まれた自然環境を守る環境自治体として前向きに取りくんでいたこと目先の事より未来の時代を想定して取りくんで来た。「緑と人間の調和を求めて」これが町是として元町長の藤谷豊代の時代から取りくんで来た精神。今もこれからも、この町是を柱に未来の町を創造して行く。だからこそ半島全域を自然遺産にと思い隣町羅臼町も当時の町長、町議会、住民の皆さんも共に協力をしてくれたこと 斜里も羅臼も漁業も観光、農業、林業、町民も背面の豊かな環境があり、その恵みをいただいて生かされている。生き様の中に唄が生まれ、物語が生まれ、人々の心が育まれていることに我々は早く気付くべきだった。1994年秋から羅臼町と共に北海道庁に行くも無関心。知床より大雪山国立公園でしょう！環境省も林野庁もあまり感心が無かった、自然遺産の担当は環境省自然環境局計画課で、歴代の課長に要望してもOKの返事はなし。1997年平成9年、100平方メートル運動20周年国際シンポジウムを斜里町で開催。IUCN世界遺産委員会副委員長ビング・ルーカス氏を招待。半島を一周してもらい帰国する夜に、午来さん知床の遺産登録はあなたの情熱しかないですよ。知床は素晴らしい。頑張る。と固く握手をして別れたこと。

ルーカス氏の言葉を苦しい時に想いつつ両町の関係する全ての皆さんに協力を願った。

一人では何も生まれぬ多くの賛同が必要だ。山を歩いていた事で環境省の歴代現地のレインジーの方々、北海道庁の方々とも知り合い、人と人の絆は大切だとしみじみ思う。

1999年頃、鹿児島県庁に派遣されていた小野寺浩さん。彼は屋久島を世界自然遺産に登録した影の立役者であり、彼が本当に帰ってくる情報を知り早速、羅臼町辻中町長と共に環境省に要望し上京。知床の四季のこと、山のこと、森のこと、海と川のこと流水の恵み、北半球で一番南限が知床であり、半島の生態系や野生動物のこと。彼はだまって聞いていて、午来さん、流水で行きましょう～後関係省庁の方々

と連携を取るのだから俺にまかせろ。役所に帰ってもだれにも言わないでほしい。うれしかった。これで1歩も5歩も実現が近くなった。あの感動は今だに私の心の灯となっている。地方の町長が国や道庁に計画に無いものを理解させるのは大変なこと。理解をしてくれると力強い味方であり、さすがプロ集団である。環境省、北海道庁の担当職員は斜里、羅臼の関係者と精力的に行動をしてくれたこと。地元としても説明会を十数回実施。登録のための組織を創り熱意をもって対応をした。

そして2005年7月10日から南アフリカ、ダーバン市でユネスコ第29回総会の案内があり、斜里からは町長、羅臼からは岩原議長、道庁からは高橋はるみ知事、高橋道議会議長、他職員の方々と共に南アフリカに向かう10日午前中にダーバン市に到着するホテルに荷物を置いてダーバン市の国際コンベンションセンターの会場には、すでに松浦ユネスコ事務局長、環境省の黒田審議官、外務省、林野庁の皆さんに挨拶をして知床の議題がどのようになるのか一番気になることを聞きたい。早ければ12日午後から議題になるようとのこと。ところが12日13日になるも審議が進まない。夕方になって14日には議題になるとの情報があり一同安心。7月14日8:00会場で環境省の報告で議題は多いが先に知床を11:00頃から審査にとのこと。10:30までに会場に入る。11:00審査に入る。先に大型スクリーンに知床半島の空撮やエゾシカ、ヒグマなどが映され、説明はIUCN調査部長、知床に調査に訪れたロ・シェパード部長にまとめていただいた。すぐに審査に入り、議長が会場の関係者に賛否を問う。三ヶ国から賛成、おおいに賛成との声あり、議長から賛成の方は拍手をとの声が会場に流れ同時に各国の関係者700名近い会場は大きな拍手で知床が登録決定の瞬間だった。ダーバン7月14日11:30。拍手が終わった後、松浦局長と高橋知事の挨拶があり羅臼町議会議長と固い握手をする。

多くの人々にお世話になったこと環境省の皆さん、林野庁の方々農林水産大臣の武部代議士、小池環境大臣そして地元の皆さん、特に羅臼漁組の石黒組合長の苦勞のおかげで登録可能になったこと、漁民の不安を理解をまとめてくれた私にとって恩人の一人拍手がやんだ時、多くの人々に苦勞をかけたことを想い、急に涙が止まらず会場の中でうずくまり、声を出さずに泣いた。外に出て役場、報告を待っている関根助役や議長や町民会議会長に会場の気持ちを伝える。マスコミの皆さんに囲まれ、うれしかっ

たこととお世話になったこと、これからの知床のこと、羅臼町、斜里町の永年の悲願だったことを思うと涙が止まらなかった。私の一生の思い出である。

知事はゴールではなくこれからがスタートだ。その通りであり今後多くの議題に答えを出して行く。国と道そして両町で知恵を出して取り組む。世界の宝になった知床、この知床のステージから世界に向けてどんな発信が出来るのか問われている。

世界が見ている

未来に向かって

私はなぜ自然にこだわったか、前に述べたように先住民族の生き様に触れたが、今の私達に欠けている物。目先の利益だけ 自分の代で食いつぶす それでいいのか！

知床で夢を買いませんか?!100平方メートル運動も100年500年の故郷を思いその恵みは人々に幸せを与える。前に書いたが、海も森も川も元気でないと文化は生まれません。人々の心に月の音、宇宙の星々、夕陽や吹雪や流水、台風のこと。心を耕すために未来に向かう今に生きる我々は何を遺せるか。

私は後世に知床を残すことこそ、町としての精神だと思ふ。羅臼町と共に行動を起こした。

自然保護で飯が食えるか、文化で飯が食えるか等々随分言われたもの。40年百姓をやり歩き続けたこと、自然は人を救う。恵みを受けて生きながらえることに思いを込めて歩き続けたことが良かったと、今しみじみと感じる。自然遺産登録10周年、このステージから世界に発信する計画が着々と進んでいる。その一つは知床自然大学院大学を設立したい。世界的にも国内でも野生動物の被害が大きく報道され、人間との共生をどうするか、知床フィールドに学校法人による2年制の専門職大学院大学とし施設は斜里町や羅臼町など周辺に設置。教員を合わせて120人以内を想定。講義室や実習・研究棟・標本室・図書室・学生会館など、カリキュラムは大学院の博士前期課程か専門職大学院の修士課程を想定。36単位以上の取得を修了条件にする。野生生物学や地域経済学などの必修科目の他、環境法学、エコーツーリズム学などの選択科目も入学対象者は野生生物の保護管理や生態系管理、環境保全全般に関する専門職や研究者を目指す学生や社会人、進路としては国や地方自治体の野生生物対策担当者や企業、団体の環境セクション担当者、環境NGO職員、発展途上国の環境保全担当者などを想定。財団設立者には上野洋司、知床斜里観光協会長と午来昌、代表理事は東京農大生物産業学部の田中俊次教授、理事や顧問

には野生動物の研究者、自然保護団体関係者理解をいただきすでに行動をしている。2018年開学を目指して行動中。ぜひ知床からメッセージを多くの人々に伝わるように夢を具現化するために頑張りたい。

次に、知床世界自然遺産を北方四島及びウルップ島まで拡張計画を実現するために、NPO法人日露平和公園協会を設立し、今行動中ですがロシアとの関係は難しいが諦めずに歩み続けたい。

北方四島は知床と同じ生態系にあり、この拡張について未来の地球環境と人類の宝として実現したいもの、地球住民の一人として心ある同志と続けたい。

世界自然遺産知床の特徴は、生態系と生物多様性、日本4地域があるが、面積からも国内では最大。他の3地域は生態系のみ。知床は、生物多様性が加わり海域も陸域もシャチ、シマフクロウ、シレットコスミレ等高く評価された知床。この宝を大事に守り育てることがこの地に住む人々の責務であり、次世代を背負う子供たちへのメッセージになることを切に想う。2015年フランスでのCOP21に全世界の国々が参加、地球温暖化対策は待った無し。世界各地での異常気象、オホーツク海の流水原も年ごとに減少にある。

オホーツクに住む一人一人が感心を持って未来に歩むことを願う。

“第51回日本赤十字社医学会総会”メインテーマは、つなげよう赤十字の温故知新一オホーツクからの新たな一歩― 特別講師として参加をして感じたこと、大会まで準備をしたスタッフの皆さん、大変なことをやりこなしたこと、多くの人々との交流をはじめ、日赤の仲間とはいえ、北から南まで歴史も文化も異なる地域に住みながら赤十字の精神の元、災害発生の際は早期に医療チームを派遣、海外・国内を問わず、いち早く行動できるシステムは国民にとって安心、安全な日赤として高く評価されています。

今回の大会、吉田院長をリーダーに無事に終えられたこと高い評価を受けたこと、そしてなによりも地域医療の中心として周辺町村の要としての北見赤十字病院、今後とも地域との連携が深まるよう希望する。

院長も、スタッフの皆さんも休みの時は湖や海辺、森、夕日、草原の風上、心を開いて下さい。北見赤十字病院の元気を祈りつつ。